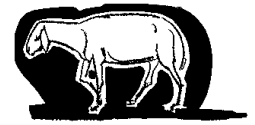


『主の御顔を避けて』 (要旨)
聖書箇所：ヨナ書1章1節～3節



【1】アミタイの子ヨナ

今朝取り上げる人物は、アミタイの子ヨナと呼ばれる人物です。「大きな魚にのみ込まれたヨナ」で知られるヨナ書は、一見寓話のように見えます。しかし旧約聖書の歴史書には、彼の出身地と預言者として活動した時代が具体的に記されています。「…イスラエルの神、主が、そのしもべ、ガテ・ヘフェル出身の預言者、アミタイの子ヨナを通して語られたことばのとおりであった。」(II列王記14:25)

彼はガテ・ヘフェル出身で、北イスラエルの王ヤロブアム2世の時代(前792-753)に実在した預言者でした。

【2】「知っていること」と「従うこと」

神様は、悪名高いニネベの悪を見過ごしにはなりません。とは言え、そのまま滅ぼすことを望まずに、悔い改めの機会を与えるべく預言者ヨナを遣わそうとされます。「立ってあの大きな都ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。」(ヨナ1:2)

預言者とは「神の代言人」であり、神のことばを「預かる者」です。ヨナは預言者ですから、神様が自分に命じられたことを理解しました。しかし理解した上で、従うことを拒否しました。

タルシシュはニネベの逆方向に位置しました。ヨナはタルシシュに向かうことで、神様の命に従う意志がないことを神様に伝えています。何らかの理由でニネベに行くことが自分の意にそぐわなかったのでしょうか。

【3】主の御顔を避けて

こうした彼の行動は、「主の御顔を避ける」ものでした。「しかし、ヨナは立って、主の御顔を避けてタルシシュへ逃れようとした。」(1:3)

この「主の御顔を避ける」で思い出されるのが創世記の記述です。

「そよ風の吹くころ、彼らは、神である主か園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。」(創世記3:8)

アダムとエバは、神様との約束を破り、園の中央にある木の実を食べました。その後、彼らは神様の声を聞いて身を隠しました。「御顔を避ける」とは、「神様の臨在から離れる」ことを意味します。ヨナが「主の御顔を避けた」のは、神様から遠く離れたかったからなのでしょう。彼は主なる神様が「海と陸を造られた天の神」(ヨナ1:9)であることを認めていましたから、もちろんそれが不可能であることは百も承知でした(参照:詩篇139:7-10)。けれども彼はタルシシュ行きの船に乗ることで、それまでの神様との繋がりを遮断して、従う意思がないことを示しました。こうしたヨナの姿から、神様のことばを知ること＝神様の御心に生きること、ではないということを知られます。

【4】人々と一緒に

ヨナは主の御顔を避けて、人々と一緒にタルシシュへ行こうとしました。3節には2回、「主の御顔を避けて」が繰り返されます。これはヨナが神様から離れようとしたことを強調しています。そして2回目のところには、「人々と一緒に」と書かれています。神様と向き合うことをやめ、自分と同じ方向に向かう人々と一緒に船に乗りました。おそらくヨナは、人から問われれば、自分の行動の意義を雄弁に説明することができたことでしょう。彼はいわゆる犯罪に手を染めたわけでもありません。しかし神様と向きあうことを拒み「主の御顔を避けた」のです。

実はこうした経験は、ヨナに限ったことではありません。私たちも主の御顔を避けたいこともあるのではないのでしょうか。みことばを聞きたくない、祈りたくない、交わりから距離を置きたい等。神のことばの意味がわかるからこそ従いたくないと考え、離れようとするのです。こうした望ましいとは言えない状態にあることと向き合うことは辛いことですが、実はそれ自体が、神様を知り、信じる者とされたゆえの経験だと言えるでしょう。

神様はあなたに「どこにいるのか？」と尋ね、あなたの帰りを待ってくださるお方なのです。(参照:ヨナ10:14, 詩篇139:23-24)